

## 環境と共生するコミュニティ空間の事例的分析

- その2 ; 台湾・台北市を例として -

日大生産工 ○坪井善道

日大生産工 川岸梅和

日大生産工 北野幸樹

### 1. はじめに

前年度報告したカンボジア・シェムリアップ地域の調査<sup>\*)</sup>に続き、台湾・台北市を事例とした調査結果の報告である。台湾は、農水産業中心のカンボジアと対比的に、17世紀にヨーロッパ諸国の貿易拠点として位置づけられと共に、華人特有の盛んな商業・流通活動等の都市型産業を中心に繁栄してきた。

台北の第三次産業比率は70%(2006)と高く、また、サービス経済の中心である台北は固有の建築と外部空間によって構成されている。

本研究の目的は、環境共生型コミュニティは自然環境と都市のような人工環境がコミュニティ空間の形成にどのように関わっているか明らかにするものであり、前年度はカンボジア・シェムリアップ地域の調査結果から、自然環境がコミュニティ空間の構成と密接な関わりのあることを事例的に示した。

本稿は、日本の統治時代(1895~1845)の都市計画と相まって、歴史的に固有の都市空間を形成してきた台北市を対象に、都市空間特に固有の外部空間(Exterior Space)およびコミュニティ諸施設が、華人固有のコミュニティにおける住民の日常生活の場として活用・維持されていることを実証することを目的としている。

### 2. 台湾および台北市の特性(人口,気候)

台湾の人口(2009)は約2,300万人、台北市の人口は約265万人である。総人口に対する高齢化率は10.63%(2009)であり、日本の約1/2であるが、少子化の影響により2015年以降急激に高齢化が進展し2055年には35%(日本は40.5%)となる。したがって、高齢化の進展度は日本より早いことになる。

また、台湾は亜熱帯性の気候条件であり年間気温に着目してみると、台北市の年間平均気温は23.6℃と比較的高く、冬季の最低気温は14℃であり、特に寒さに抵抗力の無い高齢者層にとっても、外部空間における日常生活行動を妨げるほどの気温の低下する季節はない。

以上の自然環境条件からして、都市の外部空間(Exterior Space)の構成の仕方が、コミュニティの維持・活性化、特に高齢者のコミュニケーションの場として外部空間の利用を誘発しうることが考えられる。

### 3. 調査

#### 1)調査対象および調査方法

調査は、2012年8月28日~30日に行った。調査対象地区については、研究目的に合わせて中国科技大学の徐淵静、李東名、孫啓榕、顔敏捷の各先生からのご助言により選択した。また、周世璋先生からは地図等の資料を多数提供いただいた。

特に、孫先生および顔先生には調査に同行いただくと共に、専門的観点からの説明をいただいた。調査は台北固有の建築空間、外部空間の利用形態特に、高齢者の日常生活行動において、建築施設および外部空間がコミュニケーションの場としてどのように利用しているかに視座を据えながら目視観察を行った。

#### ① 寺院—龍山寺— (Fig.1: 地区A)

台北には多数の仏教寺院があり、各々寺院には信者(檀家)を取り込んでいる勢力圏(縄張りの範囲)を有する。かつ、寺の経済的利権の空間的範囲とも重層していることから、寺院同士の縄張り争いに発展したこともある。

A Case Study on the Community Space formed by Environmental Symbiosis

- Prat2: A Case of the Taipei City Taiwan -

Yoshimichi TSUBOI Umekazu KAWAGISHI and Koki KITANO

龍山寺から西方向約 0.5 km の淡水河東岸にある荷揚げの場所（船着き場）は、1851 年から始まった寺龍山寺との縄張り争いは、近くに立地する青山寺が負け、今日では川は重要でなくなったが、当時は物資の集積・流通拠点としての経済的利権を龍山寺は得たことになり、勢力圏を拡大した。

”寺の縄張り”がコミュニティおよびコミュニティ空間のまとめり（空間的範囲）に関わっている。

台北市でも開発の最も早かった萬華地区にある台北の名刹である龍山寺（ロンサンスー）は、仏教寺院であるが、中国漢民族の伝統宗教である道教を基本にしていることから神仏混淆寺院でもある。「不老長生の術」のような教義がいわば実利主義的な華人固有の気質に合うのか、地元住民の信仰・活動・集会、すなわち主に台湾系の人々のコミュニティの中心空間として機能している。また、公園が少ないため寺院の境内が人の集まる場所であり、都市内のオープンスペースとして機能している。

②公園・屋台—艋舺公園・龍山商場— (Fig.1: 地区 A)

龍山寺の南門前の通り（廣州街）を隔て約 0.83ha のオープンスペース（艋舺公園）がある。以前このスペースは、一般にインフォーマルな営業形態であるとみなされている屋台街が占拠していたが、高速鉄道（MRT:台北捷運）駅に通ずる地下街（龍山商場）に移設された。

公園の南側に設けられた休憩用のテーブル・イスは中高年の人たちが占拠し、おしゃべり、碁、賭けごとなどの卓上ゲームに熱中している。

これらの人たちは周辺の各々の居住場所から、家族のいる人は朝食を家でとってからくる。公園内の各々の居場所に朝 5 時頃から夜 10 時位までいる。公園利用者には、台湾の歴史的事実を背景とするが、本島人（台湾系）と中国人（大陸系）の棲み分けがあり、集まる場所も異なる。大陸系の人々は台湾語が話せない。公園に集まるのは主に大陸系の人たちで、本島人は寺の広場、店の前に集まる。公園ではお互いに知らない同士でも話す。また、公園にいる高齢者など然るべき対象となっている人たちの食事は政府が給食によって賄われている。

台北の公園は特に高齢者にとって日常生活空

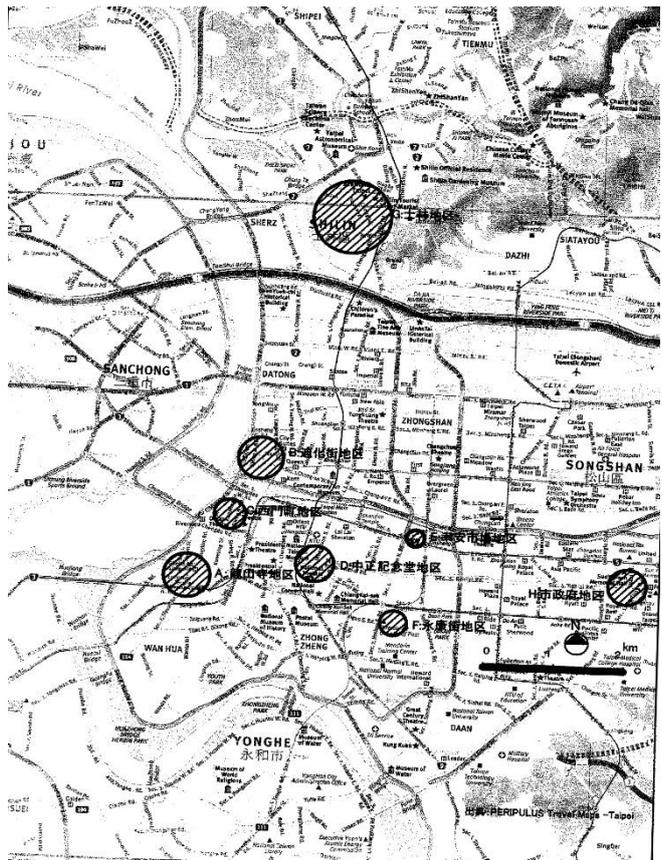


Fig.1:調査対象地区



Fig.2 迪化街歴史的地区-中心の施設は永樂市場-

(地図提供：中国科技大学,周世璋教授)

間であると共に、コミュニケーションの場として機能している。

また、台北には公園が少ないので、寺院がオープンスペースとして人が集る場所になっており、その周辺の屋台食堂には、主に中高年の人が食事にくる。屋台の場所代は徴収されない。

### ③ 市場

市場は伝統的に、日常生活上必要なコミュニティ中心施設として機能している。いわば、単なるマーケットではなく、コミュニティセンターとしての機能を果たしている。

#### (ア) 幸安市場・図書館 (Fig1: 地区 E)

一階は日用品、2階は食品、3～4階は図書館となっている。また、街中の図書館が老人の居場所になっている。市場にくる住民は商売している人も知り合いなので、話にくる目的でついでに買い物をする。市場は図書館と共に、コミュニティの公共的な中心施設となっている。

#### (イ) 永楽市場 (Fig1: 地区 B)

後述の迪化街にある市場である。日本統治時代には、霞海城隍廟 (1859 創建: 迪化街地区に住む台湾人の精神的支柱であった) に隣接する広場であったが、2000 年に周辺の青空市場を集め収容するため建てられた。活きた鶏、誂えの衣服などあらゆる衣・食・住に関わる多様な日常生活用品を販売している。また、伝統芸能の舞台も設置されている。

建築施設は道路 (迪化街一段) の拡張された部分に面した側には、半戸外空間の中国建築固有の亭仔脚 (アーケード) が設けられ、屋台・露店が営業している (Fig.2)。

### ④ 夜市 (Fig.1: 地区 G 他)

台北市内には 12 か所の主な屋台・露店による夜市がある<sup>4)</sup>。

日本統治時代に開設 (大同区: 大稻埕) されたが 1970 年代に各地にできるようになった。夕方 6 時ごろから朝 5～6 時ごろまで開いている。警察が車路のラインを決めており、日本のように厳冬期間がない所為か、季節に関係なく開設される。台湾人の食習慣上、大家族は家で食べるが、一般に週に一二回は夜市の屋台などで外食する。また、昼間会社勤めの人が副業に屋台・露店を夜間営業している例も多い。場所代、税金はない。

当局が建前上好ましい営業形態として認知していない一方、観光資源として重要であり、食習慣上の理由から規制も難しいということから、新規参入者の営業はできないが、当事者の

父親、子供は可能であるとしている。シンガポールのようにインフォーマルな営業形態はホーカーズセンター<sup>1)</sup> (hawkers: 行商人) にまとめることは失敗し、警察が車路のラインを決めている程度で、タイ・バンコクのようにインフォーマルな路上営業が容認されている<sup>2)</sup>。学生も大学の食堂より安く味の良い屋台を利用する。飲食屋台・露店の他、日用雑貨他の露店も設置される。

一方、台北で最大の士林観光夜市 (Fig.1: 地区 G) の中心屋台街は、新設の室内空間された市場の地下 (美食広場) に集約された。地下階および士林地区街路の店舗群は常設夜市として夜間のみ営業し昼間は閑散としているが、地上階の市場は昼間でも地域住民で賑わっている。士林市場のように、一般に市場に隣接して廟がある。

尚、夜市の店舗は飲食店だけでなく、遊びの店もあるが若年層を中心としたライフスタイルの変化を要因として減少傾向にある。

### ⑤ 亭仔脚

歴史的に台湾固有の町屋形式の住・商併用の沿道商業建築の地上階に設けられたアーケード空間である<sup>\*2)</sup>。また、東南アジアの華人街のショップ・ハウス<sup>\*3)</sup>に建築形式は類似しているが、中国独自の様式である。

中国の南の方に多く見受けられるが、各地にもある。しかし、北の方の地域には、気候条件の所為か、李東名先生によると、亭仔脚のないものあるとのことである。

日本統治時代の 1927 年 12m 以上の道路は亭仔脚を設ける条例が制定された。日本統治時代には 2.4m 通路としてとる規則がある。歴史的な亭仔脚つき建築は迪化街に多く残り、固有の街並みを形成している (Fig1.: 地区 B)。

台湾独自の風土に合わせ、台湾当局による 1973 年制度の改訂が行なわれ、道路幅等によって違う基準が設けられた。

- ・商業地域では 8 m 以上の道路に義務付け
- ・住宅の場合は必要ない。
- ・地域によってルールが違う。
- ・商業地域では私有の敷地にとることを義務づけ。

「亭仔脚」空間は、公共の利用に供する歩廊であると同時に飲食店などのあふれだし営業空間として利用されている。また、置いてある椅子・ベンチには高齢者が昼間長時間滞留する場所としている。私有地であり、かつ建築と一体

化しているため、日本統治時代には隣地路面と揃える等の規則があったが、観察によると歩道部分は個々の建築の地上階床レベルに合わせてあり、その高低差のためアーケード部分は、特に高齢者が歩くにくい、歩いている人は文句を言わないとのことである。公共性優先の歩行空間としての規制はなく、公的むしろ私的利用を優先する公私混在空間であり、日本と違い公と私の区別を厳密にしない台北固有かつ中国的な柔軟性を持った外部空間利用形態といえる。

#### 4. 台北市の居住形態の変化

台湾は所得格差が広がっている。また、所得、年齢、出身により棲み分けがある。

台湾の人は郊外に住むことを好まないため、台北市に隣接するニュータウンは失敗した。

都市内に住むことを特に若年層は好む傾向にあり、マンションが増加しているが、高額物件では200万/1.75㎡(377万/坪)はする。また、マンション化により近所づきあい合いはなくなりつつある。

また、核家族化傾向、一人暮らしの若い人の増加傾向からも今日的な都市型ライフスタイルに変化しているといえる。しかし、外食を好む食習慣は維持されている。マンションなどの建築は建てる前に敷地を一時的に公園、駐車場にしておく、床面積の割り増しが受けられる。日本の「公開空地制度」と異なり、公園・緑地は永続的には維持できない柔軟な制度である。

信義区基隆路の低所得者用集合住宅・興隆整宅(約500戸)には、50~60才代の一人住まいが多く、一戸あたり面積30㎡~50㎡、5000円の家賃他補助を受けている(Fig.1:地区H)。ボランティア、コミュニティグループが生活の援助をしているが、一人アパート住まいの貧困高齢者はコンプレックスがあり、一人居室内にこもって生活しあまり外には出ない。

#### 5. 調査結果のまとめ

・コミュニティのまとまりは、寺院(廟)の勢力圏、市場の商圈、公園の利用圏が重なりながら構成されている。

・日本の沿道空間にはない〈亭仔脚〉を建築に設ける制度によってアーケード空間が確保されることにより、歩道としての公共的用途と飲食店等の営業空間としての私的利用による公私共用空間が台北固有の街並みと賑わいを創

出している。また、日常的に近隣住民、高齢者の交流の場として利用されている。

・公園は本土系、台湾系の人の棲み分けがあるが、多数の高齢者が日常的に集まり、一日過ごす空間として利用されている。

・市場はあらゆる日常生活用品、サービスを提供するとともに、地域中心施設とし機能を有している。

・公共施設として図書館が高齢者の交流の場として利用されている。

・夜市、屋台・露店は飲食系の営業が多く、外食をする台湾の人達の食習慣からも台北の人たちに利用されている。タイ・バンコク、シンガポール等東南アジアにもあり、仮設的な店舗であり場所代を取らないなどインフォ・マルな営業形態としての側面を有するが、台湾人の日常生活上必要なものとして認知されている。

・所得格差が広がりつつあることから、低所得者層、特に高齢者の居住環境及び生活援助の必要性が増加しつつある。また、生活保護を受けている高齢者は、居室に引きこもる傾向にある。一方、住宅のマンション化が進展し、若い世代を中心に住民相互のコミュニケーションが徐々に希薄化する傾向にある。

〈本研究は文科省の「アジアの発展途上国の都市における街路空間利用形態に関する事例的調査・分析」に対する援助(23-25年度)による。〉

#### 注釈:

- \*1 坪井善道・片桐正夫・川岸梅和・北野幸樹，“環境と共生するコミュニティ空間の事例的研究 - カンボジア・シェムリアップを例として - ”:カンボジアの自然環境と外部空間利用形態の関係についての調査 第45回日本大学生産工学部学術講演会 2012年12月1日、講演番号 6-18
- \*2 李東名・学位論文, “台北における亭仔脚付き町屋建築” 2001年9月 P2 : 台湾固有の歴史的町並みについて論述
- \*3 一般に東南アジアに散在する低・中層の店舗・住居併用住宅をいう。

#### 参考文献

- 1) 大塚一哉 / 木下光 / 丸茂弘幸, “シンガポールにおけるホーカーセンターの歴史の変遷に関する研究” 日本建築学会計画系論文集, 巻号73(627), 2008-05-30, pp. 1029-1036,
- 2) 坪井善道 / 北野幸樹 / 渡邊佳英 / 秋山慎之介 / 渡邊貞文, “タイ・バンコクの街路空間利用形態に関する研究 - スクンビット地区における屋台・露店の設置状況調査を通して” 日本建築学会計画系論文集, 巻号: 647, PP. 93-100 年月次: 2010-01-00
- 3) 司馬遼太郎, “台湾紀行”, 2012. 9. 13 朝日新聞出版
- 4) 酒井享, “台湾×夜市” 2011. 01. 15, 情報センター出版局
- 5) 後藤治監修/王惠君/二村悟, “台湾都市物語”, 2010. 2. 28, 河出書房新社
- 6) 地球の歩き方編集室 “地球の歩き方 13~14 - 台北 - ” 2013. 7. 8, ダイアモンド・ビッグ社 他